

ふえる外人の訪問客

水俣病の研究・取材に

数カ月滞在の写真家も

このところ水俣市に外国人の訪問が多くなっている。不断なら港に外国船がはいり、ショッピングする姿を見かける程度だが、ここでいうのは水俣病の研究や取材にくる人たちのことである。

ことしにはいつてからアメリカのロータリークラブ会員、同FD A（米食品医薬品局）、夏には夏休みを利用したアメリカの大学生の集団、中国記者、バーチエツト記者（オーストラリア生まれ）、現在訪れているのではアメリカの報道カメラマン、ユージン・スミ

スさんがいる。数日の滞在が多いが、スミスさんは数カ月滞在の手定。

こうした人たちのためには一つの決まったコースといったものがある。湯の尻リハビリテーションセンターと患者家庭めぐりである。ほとんどの外国人が「水俣病のことについては本国での新聞報道などで知っている」と答える。しかし数日の滞在で患者を見るだけでほんとうに理解してもらったかどうかとの疑問もある。こ

風俗、宗教その他もろもろの違いを乗り越えて、患者の内に秘めた苦しみを読み取れているかどうか。ある写真家さんは「ユージン・スミスさんは世界で有名なカメラマンだ。しかし彼が少なくとも日本人の感覚に訴える写真をとろうとするのなら長時間を要するだろう。ただ、外国人の目で見て、外国人の頭の回路にすんなり乗るようなものを捜すのなら話は別ですがね」と言っている。

スミスさんに限らず確かに外国人には取材上の力がある。だからそんなうるさい注文をするのがしよせん無理なことで、大きな意味で、水俣病を繁栄の裏にあるもののシンボルとして理解出来るならそれでいいのではないか」という意見もある。